六角堂頂法寺は六角通烏丸通のひんがしにあり、天台宗にして開基は聖徳太子なり、本尊如意輪観音は金像にて長一寸八歩なり。〔西国十八番巡礼所、洛陽巡の三十三番〕抑此尊像は、むかし淡路国岩屋浦に夜々光あり、漁人これをあやしみ網をおろすに、朱の唐櫃を得たり、其櫃の上に正覚如意輪の像一体、謹上日本国之王家と書せり、よつて内裏に献るに、太子早く見給ひて、是こそ我前生七世の持尊なりと尊崇し、常に随身し給ふ。時に摂州四天王寺を造んとて材木を所々に求らる。其頃此所を山城折田郷土車里といふ。太子此邊を徘徊しこゝに来り、清水に澡がんとて、かの尊像を■樹にかけ置、浴すみて像を取給ふにいと重くして離るゝ事なし。其夜の夢に本尊告て曰、我太子のために持せらるゝ事七世、今又此地に因縁あり、願ばこゝにありて永衆生を利益せんと宣ふ。然るに東方より一人の老嫗来つて曰、此傍に大木の杉あり、毎朝紫雲覆り、是こそ霊材なりといへば、太子是を見給ひ、則きらしめ他木一株も交ず六角の堂を営給ふ。其後二百五十余歳を経て、桓武天皇都をこゝに定させ給ふ時、官使条路を極むるに、六角堂小路の中に当れり、皆是を愁しかども、太子建立精舎を他所に移さん事いかゞと沙汰しければ、俄に黒雲下りて此堂自五丈許北の方に退けり、故に事ゆへなく小路を通して都となりにけり。〔一説には高麗国光明寺に在りし尊像なり、然をかの国の僧徳胤これを迎て太子に献しともいふ〕

池坊の立花〔当坊住職の中専慶法師立花を愛し、木立興あるをば食をわすれてもとめ、深山幽谷のさかしきをもいとはず尋あるき、其心切なるを当寺の本尊感じ給ひ、立花の秘密を霊夢に授給ふ。是より代々其伝をつぎ、中興又専好と

いひしより其風を改め家本とす。毎年七月七日二星の手向として、都鄙の門人方丈に集り立花の工をあらはすなり、見物の諸人群をなせり〕